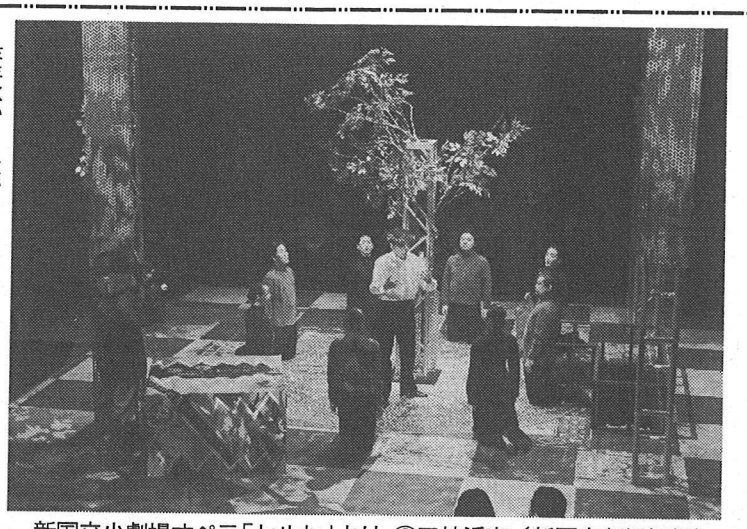
週刊新聞『オン・ステージ』2006 年２月３日、第２面、「音楽評」山之内英明氏

音楽評

好対照だったヘンデル二公演

「ヘラクレスの選択」で音楽の楽しさ実感



新国立小劇場オペラ「セルセ」より ©三枝近志（新国立劇場提供）

昨年秋から日本でもヘンデルのオペラやオラトリオが演奏される機会が増えて来た。正月気分も抜け切らない十二日には、新国立劇場の小劇場オペラシリーズで歌劇『セルセ』が初日を迎え、翌十三日にはヘンデル・フェスティヴァル・ジャパンが、浜離宮朝日ホールでオラトリオ『ヘラクレスの選択』を日本初演。ヘンデルは声楽作品で本領を発揮する作曲家なので喜ばしい事態だが、そこでヘンデルの音楽が本当に大切に扱われているかという意味では好対照の二日間だった。

『セルセ』は、長らく下積みを重ねて来た三浦安浩を演出に起用して、新国立劇場の小劇場を舞台の周囲をぐるっと囲む客席配置にした点で注目を集めた。客席の配置からも演劇性重視の舞台になることはある程度予想されていたが、全三幕の『セルセ』を解体し、公園の一隅での映画『セルセ』を撮影するスタッフや役者による全二幕のドタバタ劇に再構成するという三浦の演出プランは、作品に内在する魅力を伝えるという姿勢からは程遠いものだった。タイトル役セルセをテノールの高野二郎、その弟アルサメーネに羽山晃生、アマストレに山下牧子など、繊細な表現の出来る歌手が揃ったにもかかわらず、煩雑な動きを伴いながらでは、技巧的な箇所ではコロラトゥーラに集中できない恨みがあった。観客も、目新しさはあっても、聴かせ所のアリアで、劇的な必然性のない演技に気が散って、歌の情感に焦点が定まらない。

また、平井秀明指揮のオーケストラは、舞台脇に追いやられたという点でも、また通奏低音にリュート系の楽器が含まれないなど、多彩な音色を追求する余地がないという点でも、豊かな響きを達成することは見込めない。残念ながら、「ヘンデルの音楽は誰のものなのか?」と首を傾げたくなる今回の舞台は、ヘンデルの数あるオペラの中でも最も親しみ易い作品の真価を伝えるものでもなければ、説得力のある形で新しい側面を切り拓くものでもなかった。

一方、ヘンデル・フェスティヴァル・ジャパンの最終日は、第十番、十一番の合奏協奏曲二曲とオラトリオというプログラミング。

前半の二曲の中では、第十番ニ短調の合奏協奏曲が、バッハの中でも演奏頻度の高い「二つのヴァイオリンのための協奏曲」と同じ調、同じ音型で第一楽章の主題が始まるため、ヘンデルの音楽性を知る上で非常に興味深かった。拍節感や構築性を強く感じさせるバッハに対して、ヘンデルの場合、明るい音色と歌う低音部に特色がある。渡邊孝指揮キャノンズ・コンサート室内管弦楽団は、ヴァイオリンの表現力に課題が残されていたが、適切なテンポとアーティキュレーションでそうした曲の魅力をよく伝えた。

後半のオラトリオ『ヘラクレスの選択』は、快楽（野々下由香里）に誘惑されたヘラクレス（米良美一）が、それを断ち切って美徳（波多野睦美）に従うというギリシャ神話の世界を舞台にした寓話。チェンバロを弾きながら指揮をした渡邊は、指揮棒を擽るスタイルの通常の指揮者ほど動き回るわけではないが、オーケストラにも声楽にも行き届いた指示を与え、よく全体を統括していたし、快楽の従者役も歌った辻裕久指揮のキャノンズ・コンサート合唱団は、約二十名の小編成ながら、豊かな声と明瞭な英語で充実した歌唱。合唱とバロック・トランペットの輝かしい音に包まれて終わる終曲では、ヘンデルを聴く楽しさをしみじみ実感した。

歌手たちの出来を大きく左右したのは、発声だけでなく英語の巧拙。そうした点で、ヘンデル晩年のオラトリオには、中期のイタリア語によるオペラとは違った難しさもある。充実した歌を披露したのは波多野と出番が少なかった辻の二人。特にカウンターテナーには新しい人材の登場が待望される。

山之内　英明